言語変化の再現
(Simulating Language Changes)

前田　満

1．序論

本稿は動詞起源と思われる間投詞（interjection）の発達についての考察である。Searle（1969: 30）は、発語内行為（illocutionary act）の遂行において、発語内の力（illocutionary force）を明示化する働きのある言語表現を**発語内の力の指標**（illocutionary force indicator、以下 IFI と略記）と呼んだ。発語内行為の研究に先鞭をつけた Austin（1975）は、もっぱら遂行動詞（performative verb）に注目したが、Lyons（1977: 743）が指摘するように、発語内行為を通言語的なコンテクストで展開するためには、もっと視野を広げる必要がある。本稿でとり上げるのは、まさに IFI とみなしうる間投詞で、しかも動詞起源と考えられるものである。このような間投詞を仮に「動詞的 IFI」(V-IFI) と呼ぶ。例えば、典型的な V-IFI としては、ロシア語の davajtje (давайте) がある。この V-IFI は GIVE の意味の動詞に由来するものと考えられる。

(1) *Davajtje* govorit'　tol'ko po-russki.
　　let's:2pl speak:Inf　only　in-Russian
　　'Let's speak only in Russian.'

Davajtje には発語内の力（「勧誘」）を顕示化（make explicit）するおよそ英語の let's に対応する働きがある。これはわずか1例にすぎないが、このような V-IFI は世界の様々な言語で見られる。もちろん「勧誘」の他にも様々な発語内行為に関連する V-IFI が見られるが、本稿では紙幅の関係上、「勧誘」に関わるもののみを論ずるにとどめる。

本稿の目的は V-IFI が生まれる過程を明らかにすることである。本稿が特に重点を置くのは、GO を意味する動詞に由来する V-IFI の１つ、古英語（OE）の uton である。uton がなぜ「勧誘」の指標として選ばれたのか、またどのようにして V-IFI へと発達したのか。さらにこの発達のパターンが文法化（grammaticalization）および言語変化の理論に対して示唆することは

何かを検討することも重要な課題である。OEの資料を調査しても、上記の問いに対して推測以上の答えを出すことは不可能である。これは資料の乏しさによるものである。本稿では、この乗り越えがたい史的研究の障害を迂回する策として、現代語の類似の変化との比較を行う。鍵となるのは、現代口語英語のGO+V構文(e.g. Now let's go buy some software for your computer)の発達である。本稿では、この構文の特性と発達の分析を通じて、utonの発達の再現を試みる。

本稿の構成は次のとおり。2節では、本稿の主題であるutonの特性を示し、V-IFIとして位置づける。次に、utonが実際に間投詞として分析可能かどうかを検討する。3節では、OEのように文献にしか残されていない過去の言語で起こった変化を説明するためには、現代語に見られる変化のパターンとの比較が最も有効な手法であると主張する。utonの発達過程を明らかにするさいの比較対象として、GO+V構文をとり上げる。4節では、このGO+V構文の発達を参考にしてutonが間投詞化されていくプロセスの再現を試みる。5節は本稿の簡単なまとめである。

2. V-IFIとしてのuton

この節では、まずOEの勧奨文(hortative)におけるutonの特性と用法について実例をまじえて簡単に説明を加える。

2.1 uton

utonについて説明する前に、OEの勧奨文について簡単にふれておく必要がある。まず、本稿のいう勧奨文とは、「勧誘」の働きをもった遂行文(performative)のことである。現代英語(PE)では、主に "Let's ...", "Why don't you ...?", "Shall we ...?" といった発話パターンが用いられる。[1] さて、OEのテクストには、主に3タイプの勧奨文が見られる。1つ目は、現代英語のletにつながる動詞lætan 'let' を用いる構文である。

(2) *lætað* nu huru us his sawl-lessan lichaman
let:Imp now at-least us:A his sowlless boy:A
ferian mid us
carry:Inf with us:D
'Let us now at least convey his soulless body with us.'
[*Lives of Saints* 31. 1451]

lætanは現代英語のlet同様、(対格)目的語と原形不定詞(bare infinitive)を

従えた。意味も PE の let に近い。このタイプの勧奨文では V-IFI ではなく語彙的な動詞の命令法(imperative mood)が用いられている。[2]

次のタイプの勧奨文は、主節に直接仮定法(subjunctive)[3]の動詞を用いるタイプの構文である。例えば、(3)の fare は faran 'go' の仮定法・1人称複数形であり、主語と倒置されて文頭に置かれる。

(3) *fare* we on ge-hende tunas
go:Subj:1pl we in next:A towns:A
'Let us go into the next towns.' [*Mark* 1. 38]
(小野・中尾 (1980, p. 393))

この構文の性質および発達過程については、Maeda (2007)で詳しく論じたので、ここではもうその内容をくり返さない。これは主節における仮定法の主要な用法の1つであり、OE のテクストでは使用頻度がきわめて高い。以下の議論ではこの構文を「仮定法主節」(subjunctive main clause、以下 SMC)と呼ぶ。ここで知っておくべき SMC の特性は次のとおりである。

(4) a. 大半の SMC では、仮定法動詞が文頭に置かれる。
b. 仮定法動詞が1人称複数の場合は、勧奨文と解釈される。
c. このタイプの文は発語内行為の遂行以外の用途には使われない。

最後のタイプの勧奨文が本稿の主題、uton[4]を用いた構文である。この構文は基本的に(3)で見た SMC の発展形と言ってよい。

(5) a. *Uton* clypian to heofonum þæt God ure helpe
let's cry-out:Inf to heavens:D that God us:G help:Subj:3sg
'Let us call to heavens that God should helps us.'
[*Lives of Saints* 25. 349]

b. *Uton* nu gehyran be ðan Halgan Gaste, hwæt
Let's now hear:Inf about Det:D Holy:D Ghost:D what
he sy.
he be:Subj:3sg
'Let us now hear concerning the Holy Ghost, what he is.'
[*ÆCHom*, i, 280. 8]

混乱を避けるために、(5)のように uton を持つ SMC を U-SMC と呼び、通常の SMC と区別する。統語構造については、U-SMC は通常の SMC となんら違いはない。通常の SMC との違いは、U-SMC 構文が迂言的 (periphrastic) であるという点にすぎない。つまり、(3)では仮定法の動詞が単独でlet'sの意味を表しているのに対して、(5)では同じ意味が<*uton* + Inf>とい

う複数の語によって表されているのである。この組み合わせにおいて、utonはlet'sとまったく同じ役割を果たしているように思える。だが、utonはもともとGOを意味する動詞witanの仮定法現在・1人称複数形である(cf. Mitchell (1985: 384))。その意味からすると、utonは'let's go'のように解釈されて然るべきである。しかし、(5)の例を見るかぎり、utonが'Let's go'を意味したとは考えにくい。

ここでutonがGOを表さないことを示す好例として、次の文の解釈について考えてみよう((6)のwutumはutonの異形)。

(6) *wutum* gongan to helpan hild-fruman
let's go:Inf to help:Inf battle-chief:D
'Let us go (to him) to help our war-leader.' [*Beowulf* 2648]

この例にはutonの他にGOを意味する動詞gonganがあり、かりにutonが'Let's go'と解釈されるとすると、GOの意味が重複するので、解釈はおよそ"Let's go to go to help ..."のような不規則なものとなる。このような無意味に余剰的な表現法は言語の経済性(economy)[5]にてらして想定しがたい。しかも筆者はutonが単独で使われ、"Let's go"の意味で用いられている文を1例も見つけることができなかった。[6] つまり、U-SMCのutonにはGOの意味はなく、純粋に勧奨文の標識として働いていると考えられる。

さて、Mitchell (1985: 374)によると、Ælfricは特にこの構文を好んだようで、彼が編纂した聖人伝や説教集にはU-SMCが高頻度に現れる。これらのOEテクストでは、(3)のように仮定法の動詞を用いた勧奨文はごくまれにしか見られない。この傾向がÆlfricの個人的嗜好なのか、彼が属するOEの方言の特徴であったのか筆者には知るすべはないが、テクストの性質からすると、これは当時の社会において広く受け入れられた表現法であったと考えてさしつかえない。

2.2 utonの範疇的特性

本節では、前節で紹介したOEのutonの範疇的特性について考える。上述のように、utonはもともとGOを意味する自動詞witanの活用形である。しかし、utonはすでにGOの意味を喪失しており、文法機能の上でもPEのlet'sのような導入小辞(間投詞)に近い。本稿がOEのutonをV-IFIと考えるのはこのためである。しかし、このような中間的な性質のため、過去の研究ではutonが動詞か否かで意見が分かれていた。以下の議論では、両方の立場をそれぞれ2.2.1節と2.2.2節でとり上げ、それぞれの問題点を指摘する。

2.2.1 utonは動詞か？

上述のように、utonはもともとwitanの屈折形なので、それが動詞起源であることには疑いの余地はない。ところで、注1でふれたように、Quirk et al. (1972)は、PEのlet'sが導入小辞であって動詞ではないことを示唆している。この観点からすると、ついutonも動詞ではないと考えたくなる。それでもutonを動詞とみなすことは可能だろうか。この問いに対して肯定的な立場をとるのが、Mitchell (1985: 384-385)である。彼はutonをある種の間投詞とみなす先行分析に疑問を投げかけ、utonを動詞であると主張する。その根拠は次の2点である。

①	utonは補部として不定詞節をとる： … the fact that *uton* is followed by an infinitive is decisive for 'its verbal character', unless it can be demonstrated that all the forms in *-an* are first person present subjunctive either without *we* or reflexive *us* or with preceding *we*. Both of these are unlikely … (Mitchell (1985: 385))
②	utonには代名詞主語が伴うことがある： The word [= *uton*] was originally a tense of the verb *witan*, and its verbal character is occasionally still marked by the use of the pronoun. (Ibid.: 384)

まず、①から検討してみたい。Mitchellは明確に述べていないが、完全な節には必ず本動詞(main verb)として機能する定形動詞(finite verb)が存在し、不定詞形は動詞が副次的(secondary)な位置づけをもつことの指標であるという想定を前提としている。この想定のもとでは、U-SMCにおいて定形であるのは常にutonなので、本動詞たりうるのはutonだけということになる。じっさいMitchellは、もしutonが間投詞だとすれば、後続する-an語尾の動詞は本動詞ということになり、そうだとすると、-an動詞は定形動詞でなくてはならないと考えている。彼が述べるように、utonに続く-an動詞を定形動詞と分析することは困難なので、自動的にutonは本動詞ということになる。

しかし、Mitchellは少なくとも2つの可能性を見落としている。まず、1つ目はutonがPEの法助動詞(modal auxiliary)のように「真性」の助動

詞として分析される可能性である。PE では、法助動詞は動詞起源でありながら、動詞とは異なった統語範疇(syntactic category)に属するとみなされる(Lightfoot (1979)など参照)。このため、法助動詞が不定詞をしたがえる<Aux + Inf>の構文型では、不定詞が本動詞と分析される。同様に uton が助動詞だとすれば、不定詞の方を本動詞と分析することもたしかに可能である。英語法助動詞の例を見ても明らかなように、動詞⇒助動詞という変化は決して珍しいケースではないからである。[7]

2つ目は、不定詞が単独で独立した本動詞として機能する可能性である。PE にはないが、フランス語では命令文(imperative)として働く(7)のような不定詞構文が見られる(Jones (1996: 181)の例)。(7)のような文は街頭の看板などでよく見かける。

(7) a. *Mettre* la ceinture de sécurité.
put:Inf Det safety belt
'Put on the safety belt.'
b. *Verser* le contenu dans un bol.
pour:Inf Det content into Det bowl
'Pour the content into a bowl.'

この構文では不定詞がりっぱに本動詞として機能している。[8] (7)のような構文の存在を考慮に入れると、U-SMC の不定詞が本動詞ではないとは言い切れない。少なくともこの可能性が残されるかぎり、上記①は決め手に欠けると言わざるをえない。

また②についても問題がある。確かに(8)のような顕示的な主語代名詞をもつ U-SMC は存在する。

(8) Ac uton *we* gelyfan þæt God Fader was æfre
Conj go:Subj:1pl we believe:Inf Comp God Father be:Pst:3sg ever
butan anginne, …
without beginning:D
'But let us believe that God the Father was ever without beginning.' [*ÆCHom,* i, 228. 20]

しかし、筆者の調査によれば、(8)のような例はとてもまれである。試みに uton を好んだとされる Ælfric の説教集(ÆCHom)の前半部に代名詞を持つ U-SMC がどれほど使われているかを調べてみたが、24例中たった1例((8)がその唯一の例)のみである(表1)。

−代名詞主語	23
＋代名詞主語	1
合計	24

表1

表1の調査結果は、Ælfricの手になる他のOEテクストについての筆者の印象と合致している。つまり、代名詞主語をもつU-SMCはきわめて使用頻度が低かったのである。これほど頻度が低いと、代名詞主語をもつU-SMCが当時の文法にあって生産的に用いられたと言えるかどうか疑いを禁じえない。この頻度からすると、U-SMCが顕示的な主語をもつのは、単に動詞性の名残とも考えられるので、これをutonが共時的に動詞であることの証拠とすることには抵抗がある。むしろ表1の調査結果はutonの動詞性の希薄さの証拠と考えた方がよい。

2.2.2 utonは間投詞か？

では、今度は逆にutonを間投詞とみなす分析が妥当かどうかを考えてみたい。utonを間投詞と考える動機はおそらくそれがもはやGOを意味しない、つまり、witanの意味とその語形から予想されるように‘Let's go’と解釈できないということにつきる。実際、間投詞と化した動詞は本来の語彙的意味を失い、特定の談話上の目的に特化する。身近な例として、PEのcome onを例にとるとわかりやすい。言うまでもなくcome onのcomeはもともと自動詞comeの命令形で、COMEを表した。しかし、(9)の用法では、come onに移動の意味はない。[9]

(9) a. *Come on*, you're pulling my leg.
b. *Come on*, you know there have been times when you have been wrong.

このケースでは、comeがCOMEを意味しなくなったこととcome onの間投詞化の間には密接な関連があるように思える。同様に、GOの意味の喪失をutonの間投詞化の現れとみなすことは自然である。これに加えて、utonがめったに顕示的な主語と共起しないという事実も、utonの動詞性がかなり希薄であったことの証拠に加えることができる。

しかし、この論も決め手に欠ける。なぜなら、近年の文法化(grammaticalization)の研究によると、脱範疇化(decategirization)をはじめ、一般に統語

(形態)変化は意味変化にかなり遅れて起ることが多いからである。[10] この統語特性の保守性にてらせば、uton が GO の意味を失っても当分はそのまま動詞であり続けたという可能性が残る。したがって、純粋に意味・機能に基づくアプローチだけでも uton が動詞でないことを実証できない。

以上、uton の範疇特性についての 2 つの提案を見てきたが、これらはどちらも uton が辿った文法化のプロセスを 1 つの視点――統語的もしくは意味機能的な視点――からしか考えていないという点で、片手おちとの批判を免れない。次の節では、この節で見た 2 つの分析がいずれも正しくないということを、文法化の視点から論じてみたい。

3．文法化の視点からみた uton

本稿の冒頭で、uton をその談話機能に注目して「動詞的」IFI(V-IFI)として位置づけたが、これにはできるかぎり明確な文法的特徴づけを回避しようとする目的があった。だが、これはただ問題をはぐらかすための姑息な策ではない。それどころかこれは文法化についての膨大な知見に基づく正当なアプローチなのである。文法化の研究では、文法形式の共時的・通時的様相を包括的に捉える汎時的(panchronic)な観点からの分析法を採用する。[11] これにより、文法化研究では時代をこえて連綿と存在し続ける歴史的実在を想定する。例えば、PE の法助動詞 may は OE の magan「～できる、強い」とは無関係な要素といってもよい。なぜなら、それぞれが異なった時代の社会的も文化的にもまったく異なった話者によって使用されたからである。そうであっても、時代をこえた要素<*may*>を想定することで、may と magan は同一要素の異なった現われとみなすのが汎時的なアプローチである。さらに汎時的な観点からすると、要素の統語的特性は常に変化を続ける動的な実体とみなされる。統語範疇も可変的なものにすぎないのである。

Mitchell やその他の研究者の問題は、uton をリアルタイムで変化し続ける汎時的な実体と捉えていないところにあった。つまり、uton が動詞でもなくかつ不変化詞(particle)でもない過渡的な状態にあったという可能性を考慮に入れていなかったのである。筆者の見解では、Ælfric の時代に uton はすでに間投詞化の道を歩んでおり、動詞と不変化詞の中間的存在になっていた。この「中間的」という形容詞はあいまいで厳密でないという批判をよく耳にするが、汎時的な観点からするとほとんどすべての要素が「変化中」でありそれゆえ「中間的」なのである。安定した状態は理想化である。過去の脱範疇化のケースで範疇特性の変化が明瞭に感じられるのは、変化が起こる前と

後だけを比較しているからである。変化の中間的段階を無視する(あるいは資料の欠損により再現不可能である)から変化が明瞭に思えるのである。[12]

3.1 言語変化の再現手法

世界の言語を俯瞰してみると、間投詞をはじめ動詞起源の不変化詞はとくに珍しいものではない。例えば、動詞起源の格標識(case marker)や補文標識(complementizer)はとくに有名である。Lord (1993)の比較研究によれば、アフリカ諸語では動詞が様々な格標識や接置詞(adposition)へと発達し、中にはTwi語のseなどのように補文標識に発達をとげたものがある(同様の例はHeine, Claudi and Hünnemeyer (1991)などでもとり上げられている)。動詞⇒補文標識の変化は、動詞⇒間投詞の変化に相当するかなり極端な文法化の例である。次に補文標識としてのseの例を示すが、Lord (1993)によると、これはSAYを意味する発言動詞(verb of saying)に由来する。

(10) ko ka-kyerre no *se* ommere
go speak-show him Comp he-shall-come
'Go tell him that he shall come.' [Lord (1993, 178)]

(10)では、動詞に由来するseはもう1つの発言動詞であるka-「話す」と共起しており、すでに本来のSAYの意味を失っていることがわかる。さて、ここでseがいつから動詞性を失い、不変化詞となったのかという点について考えてみたい。このタイプの統語変化は一般に「脱範疇化」(decategorization)と呼ばれ、意味の漂白化(bleaching)と並んで文法化の初動段階に特徴的な現象である(cf. Hopper and Traugott(2003))。もともと動詞であったものが不変化詞に変化したのだから、理論上はseが動詞性を完全に喪失した時点を特定できてもおかしくない。しかし、これは純粋に理論上の可能性である。統語変化は通常とても緩慢に進行するので、[13] seが点から点へと飛び移るように急激に動詞性を喪失したとは考えにくい。

したがって、ある点を越えてしまうともはや動詞ではなくなるような「ルビコン」が存在するとしても、その時点の特定は事実上不可能である。また、動詞・形容詞・名詞といった統語範疇の「境界」がそもそも明確でない可能性もある。この場合、動詞であるかどうか判断しにくい広大なグレーゾーンがあり、そこに含まれる要素の範疇帰属は容易に決定できないだろう。いずれにせよ、語彙的要素がどの時点で文法的要素に変化したといえるかを明確にできた言語学者はいないし、その変化に気付いた話者もいない。過去の状況に照らすと、筆者が筆をとっている現在も脱範疇化は日本語のどこかでひっ

そりと進行中のはずだが、それを意識することはない。つまり、先ほどの se は文字どおり「人知れず」不変化詞へと変化したのである。

Lightfoot (1979) は生成文法の枠組みにおいて、この種のカテゴリー変化が統語構造の再分析 (reanalysis) により説明できると主張している (Lightfoot (1991) も参照)。彼の言う再分析とは、言語学習者 (language learner) が言語獲得のさいに、ある表層構造 (surface structure) を前世代の話者とは異なった統語構造として分析することである。[14] これを模式的に示すと (11) のようになる。

(11) 世代 G_1　　世代 G_2

$$[_{XP}\ \bigcirc\ [_{YP}\ \triangle\ \ \square]] \Rightarrow [_{XP}\ [_{YP}\ \bigcirc\ \triangle\ ]\ \square]]$$

↑

再分析

同様に範疇特性の変化も、言語学習者がある要素を前世代の話者とは異なるカテゴリーに属するものと分析することに起因する。したがって、Lightfoot の考えによると、再分析は2つの世代間で段階的にではなく**断続的に**起こることになる。この観点から先ほどの se の発達について考えてみると、se の動詞から不変化詞への推移はかなり急激とみなされ、長くとも数十年のオーダーで起ったことになる。つまり、ある時点で前世代の話者にとって動詞であった要素が次の世代にはもはや動詞ではないという状況が実際に生まれたことになる。言い方をかえれば、Lightfoot の理論では、動詞から他のカテゴリーの要素への変化を画然と示す「ルビコン」は明瞭なのである。しかし、かくいう Lightfoot も「ルビコン」を特定する明確な方法論を提示できないだろう。なぜなら、かりに (11) のような構造変化を伴う再分析が言語学習者によってなされたとしても、いぜんアウトプットとなる表層構造は同じなので、再分析がなされたことは G_1 の話者にも G_2 の話者にもわからないからである。当の話者にもわからないことを断片的にしか残されていないテクストだけから明らかにすることは不可能に近い。

とりわけ言語変化の分析が過去の文献に強く依存する場合、変化が起こった時期を大まかにでも特定することはかなり困難である。いうまでもなく、この傾向は変化が起こったと推定される時期が古ければ古いほど強まる。言語変化が連続的であることもさるものながら、言語変化の研究にとって、最も致命的な問題は過去の文献のほとんどが口語ではなく文語で書かれているという点につきる。社会言語学で主張されるように、「現実」の言語変化は口語のレベルで起こる (Milroy (1992)、Traugott and Dasher (2002) など参

照)。[15] したがって、まず変化は口語でおこり、それが文語表現として使われ始め、最終的に文語として定着した段階で初めて言語学者にとって変化は「可視的」となる。しかも使用頻度の低い段階では表現が文書となって現代まで残る確率はとても低いので、変化の輪郭がはっきりするまでにはさらに長い時間がかかる。このレベルの精度ではとても「ルビコン」を特定するどころではない。Lightfoot をはじめ過去の史的統語論の研究の多くは、このような問題になんら配慮をしていない。[16] 筆者にとってさらに驚きなのは、Lightfoot のような研究者が現代語の変化との比較によって自分の理論の有効性を実証しようとしないことなのである。

筆者がここで強調したい点は、文献資料の信頼性の乏しさを補うためには、現代語の資料を用いる**他はない**という点である。現代語では、豊富な口語資料が入手可能なので、そこで見られる言語変化のパターンから有効な一般化を抽出できる。そしてそれを基準に過去の変化を再現すれば、少なくともより妥当性の高い説明が期待できる、というのが筆者の考えである。そして筆者が本稿で採用するのはまさにそのような方法論である。つまり、現代語の類似の変化の分析により、過去の変化のプロセスおよび原因について究明するのである。これを、かりに「言語変化の再現手法」(method for simulating language changes)と呼ぶことにしたい。[17]

そしてもう一点、範疇特性の変化の再現を行う際に、「ルビコン」——どの時点でカテゴリー変化が起こったのか——についてのこだわりをことごとく捨てるべきであると主張したい。ここで言いたいのは、先ほどの se や uton が**いつ**統語的に動詞から小辞に変化したのかという点を追求すべきではない、ということである。さらにいえば、このカテゴリー変化の時期の特定が他の変化の説明の鍵となるような説明は構築すべきではないとも考えている。変化の時期は大まかでよい。重要な点は、むしろ変化が現代語の調査により実証可能な動詞⇒不変化詞という文法化のパターンに適合する性質のものであるかどうかである。この点を証明するには、まずは談話機能上の変化に注目する必要がある。これは統語構造が変化に対して保守的な性質を持つ、つまり、統語変化は文法化が始まって長い期間が経過してはじめて顕在化することが多いからである。しかも、それが文献上に「可視化」するまでにかかる期間を考えると、「ルビコン」の特定にはほとんど言語学的な意味がないとさえ言える。統語変化が起こるはるか以前にすでに動詞⇒不変化詞という文法化のプロセスが発動されている可能性が高いからである。

さらに Harris and Campbell (1995) によると、再分析は実現 (actualization)

というプロセスをへて顕示化されるが、その段階ではすでに深層構造のレベルでは変化は完了して久しく、「ルビコン」の特定どころか変化の原因究明さえもままならない。言語変化は口語において起こるので、変化の原因はその表現が用いられたローカルなコンテクストを監察できなくては解明できない。つまり、統語変化の原因は言語資料をつぶさに調べてもわからないことが多いのである。例えば、ME 期に起こったとされる SOV⇒SVO という語順の変化に対して、様々な観点から説明が試みられているが、どれをとっても程度の差はあれ推測にすぎない。このため、しばしば研究者が採用する理論に最も適合し、一見資料とも調和する説明が「妥当」とされるが、これらの説明の中には、現代語の変化のパターンに照らして疑わしいと思われるものが含まれている。理論や資料と調和するように見えても、それは偶然の一致かもしれない。ここで史的研究の説明の妥当性をはかる何らかの基準が必要となる。現代語の変化パターンとの比較はまさにこの基準を提供できると、筆者は考えている。

実際、現代語から得られる知見は、文献上に残る変化の「反映」(注15の意味においてけっして変化の「記録」ではない)について考えるさいに欠かせない武器となる。文献上には uton がなぜ V-IFI として用いられるようになったかを知る手がかりはない。しかも文献を見るかぎり、それを動詞と分析すべきかどうかを判断する決定的な証拠もない。Lightfoot 流に考えるならば、uton はいかなる変化も受けていないと判断されかねないし、まして変化の原因究明などできるはずがない。しかし機能的な観点からすれば、文法化は意味変化・統語変化・談話機能の変化を横断するかたちで起こる。どれかだけが宙に浮いたように独立して起こるということは想像しにくい。これは現代語で立証可能な一般化である。そうだとすれば、かりに uton が統語的に変化した証拠が見つからなくても、意味変化の証拠が見つかれば、この一般化に基づいて少なくとも uton が統語変化を受けつつある、もしくは変化の軌道に乗っているものと推測することができる。ちなみに Lightfoot は統語変化が意味と独立して起こると主張しているが、このような統語変化の例は現代語ではあまり知られていない。[18]

筆者のアプローチでは、現代語の事例との比較により、uton が動詞⇒不変化詞という文法化の軌道に乗っていたこと、そしてなぜそのような変化の道筋を辿るに至ったかについて検討することが可能となる。しかもこのアプローチでは、OE の段階で uton がじっさいに動詞から小辞へと変化したかどうかは問わない。上述のように、脱範疇化を段階的なプロセスと考えるか

らである。カテゴリー変化は全か無かというデジタル的なものではなく、いってみれば30パーセントの変化とか50パーセントの変化というものがありうるからである(もちろんパーセンテージを量る基準はないが)。

次節では、utonの辿った変化について考える資料として、現代口語英語に見られるGO+V構文との比較を行いたい。この構文との比較を行った理由は<GO + V>という意味的コンテクストの類似性と、使用されるコンテクストの重なりが大きいからである。

3.2 GO+V構文

この節では、次節でutonが辿った動詞⇒間投詞という変化のプロセスを再現する準備段階として、(12)の構文の発達過程を調べる。本論では、この構文をかりに「GO+V構文」と呼ぶ。

(12) a. I'll go get you a soda.
b. Let's go have ourselves a soda.
c. Go help our chauffeur park our stretch limo.

(12)においてgoに後続する動詞は一見したところ原型不定詞のようだが、そうではない。[19] 一般的な見解では、GO+V構文は(13)の構文(これをかりに「GO AND+V構文」と呼ぶ)から接続詞andの省略により生じたものである(cf. Biber et al. (1999: 1032))。この見解の妥当性は両者の意味特性などを比較すれば一目瞭然であろう。

(13) a. Now why would you go and do that?
b. Go and ask her.
c. One of us is going have to go and get help.

しかし、GO+V構文がGO AND+V構文からandの省略により派生されているとすると、andの有無は単に音声的なヴァリエーションということになるので、外見の違いにもかかわらず両者は同一構文ということになる。

筆者はこの見方に異を唱えたい。Biber et al.自身も、andを省略すると動詞の間の関係がさらに強くなると述べている(p. 1032)。これはgoと後続するVの意味的な結びつきの強さのことを言っているようだ。また、『ランダムハウス英語辞典(CD-ROM版)』もGO+V構文には強意的なニュアンスがあるとしている。

さらにGO+V構文とGO AND+V構文の間には興味深い文法的違いがある。GO AND+V構文は過去形にすることができ、その場合、(14)のように等位接続される2つの動詞は両方とも過去形になる。

(14) a. *I went and joined* the company dinner bash.
b. *I went and saw* the cherry blossoms.
c. You've really *gone and done* it now!
d. *I went and sat* down next to her.
[J. Blume, *Otherwise Known as Sheila the Great*]

これに対して、GO+V 構文を過去形にすることはできない。

(15) a. *I went sat down next to her
b. *I went get you a soda.

この文法的な違いは、GO+V 構文が GO AND+V 構文と少なくとも部分的に異なった構文であることを示唆している。[20] つまり、GO+V 構文は GO AND+V 構文から and の省略をきっかけにして独自の**構文化**(constructionalization)の道を歩み始めたのである。

ここで少々構文化という変化のパターンにふれておこう。「構文」という用語は大雑把な意味で用いられることが多いため注意が必要である。混乱を避けるために、初めに筆者が念頭に置く狭義の「構文」を Goldberg (1995: 4)にならって(16)のように定義しておこう。

(16) C が形式と意味のペア $<F_i, S_i>$ であるときに、F_i のある側面あるいは S_i のある側面が、C の構成部分から、または既存の確立した構文から厳密には予想できない場合、かつその場合に限り、C は 1 つの「構文」である。(河上他訳による)

このような構文文法的な構文観では、「構文」とは節を構成するそれぞれの語彙項目(lexical item)が「合成的」(compositional)に結合した総和ではない。むしろ節の連辞的パターン(syntagmatic pattern)そのものが(全体論的な意味において)独立した記号として、つまり「意味と形式の対応物」(meaning-form correspondence)として独自の意味生成を行うものをいう。本稿では、このような発話パターンを**文法構文**(grammatical construction、以下 GC)と呼ぶ。

さて、筆者がとくに注目したいのは、Fillmore et al. (1988)が論じている(17)のタイプの GC である。

(17) a. The bigger they come, the harder they fall.
b. Me babysit?
c. One more word and I'll have you on report for insubordination.
d. Why not tell him right out?

(17)はどれも「化石化」した過去の構造の名残や、省略語法、コロケーショ

ンの固定化などにより生み出されたGCである。共時的な観点からすると、これらは文法規範から逸脱しており、その意味で「非文法的」(ungrammatical)であると言える。[21] このような構造をFillmore et al.は**外文法的**(extra-grammatical)と呼んだが、これはしごくふさわしい用語である。さて、先ほどあげた(16)の定義に照らしてこれらの発話パターンをGCと認定することは可能だろうか。まず、(17a)を例にとると、名詞を修飾していない形容詞の比較級の直前に定冠詞theを置くことはPEの文法規則に反し、それゆえ他の既存のGCに照らしてその意味解釈を予測できない。また、(17b)も主語が目的格になっており、この例からはわかりづらいが、動詞も原型になっている。これはもちろん文法規則の明白な違反であり、既存のGCからある種の驚きを表現するための表現法であることはまったく予想できない。また、(17c)が解釈的にある種の条件文であり、概略 "If you say one more word, I'll have you on report for insubordination" と解釈されるのはなおさら想像しにくい。以上のように、(17a)-(17c)の発話パターンはすべて(16)の定義に照らしてGCと認定される。一般に(17)のように外文法的な構造を含む発話パターンはどれもGCであると言ってよい。

(17)のうちGO+V構文に関してもっとも興味を引くのは(17d)である。言うまでもないが、この構文はもともと(17d)'から省略により派生したものである。[22]

(17d)' Why don't you tell him right out?

かりに(17d)が(17d)'の単なる短縮形であるとすれば、それは独立のGCとはいえない。なぜならその場合、(17d)の意味解釈や談話機能は既存のGCである"Why don't you ...?"の性質から予想可能となるからである。しかし、Levinson(1983: 267)が指摘するように、"Why not ...?"と"Why don't you ...?"の間には解釈の違いがある。つまり、前者には「示唆」(suggestion)の用法しかない——したがって"Why not ...?"は常に遂行的に用いられる——のに対し、後者にはこの遂行的な用法に加えて、「なぜ〜しないのか」と理由を尋ねる単なる疑問文としての用法がある。この違いは"Why not ...?"を独立のGCとして認定するのに十分なものである。つまり、"Why not ...?"が単なる短縮形であれば、疑問文として使えないことを既存の"Why don't you ...?"の特性から予測できなくてはならない。結局、"Why not ...?"と"Why don't you ...?"は省略によって生まれた2つの異形だったものが、談話における用法の違いから次第に分岐し、部分的に異なった2つのGCと認識されるに至ったのである。このように、文法規則に従って作られた発

話パターンがローカルなコンテクストにおいて特殊化し、独自のGCとして発達していくプロセスを**構文化**という。

さて、本題に戻り、(16)の定義に照らしてGO＋V構文がGCといえるかどうか検討してみよう。この判断の決め手になるのは、GO＋V構文にこの発話パターン特有の、他のGCから予測不可能な特性があるかどうかである。外文法的と言えればなおさらよい。上述のように、GO AND＋V構文との意味的な違いは微妙だが、少なくとも過去形にできないというGO＋V構文の特性はGO AND＋V構文の文法的特性から予想できないばかりか外文法的ともいえるので、GO＋V構文を独立のGCと認定する決め手になる。意味の違いについても、筆者はGO＋V構文を独立のGCと認めるに足るものと考えているが、この点については後述のとおりである。ともあれ、GO＋V構文が独自のGCとしての歩みを始めるきっかけがandの省略であったのは間違いない。最初は単なる労力の軽減が目的であったかもしれない。しかし、andの省略により表層構造に変化がもたらされ、副作用として構文の意味解釈や文法特性に変化が生じたのである。

この変化をもたらした認知的要因の有力候補は**類像性**(iconicity)である。言語における類像性とは、人間認識のパターンが言語の構造に反映されることをいい、ソシュール（1916）以来言語の重要な特性とされてきた**恣意性**(arbitrary)と対立する概念とみなされてきた(cf. Haiman（1995a, 1995b))。例えば、節の要素間の線形順序（linear order）が事象（event）の時系列順序（temporal order)に対応するという例は有名である。GO＋V構文に関してもっと重要と思われるのは、表層構造上の要素間の「距離」が概念的距離(conceptual distance)に対応するという現象である(cf. Haiman（1985a: 102ff))。これによると、表層構造(18a)におけるXとYは、(18b)におけるXとYよりも概念的に「近い」が、XとYの間に介在するものが何もないからである。

(18) a. X Y

b. X *and* Y

したがって、GO＋V構文におけるandの省略は、類像性によりgoとVが概念的により「近く」なることを意味する。先ほどBiber et al.が、GO＋V構文におけるandの省略は2つの動詞間の関係の強さを含意すると述べたが、これはまさに類像性の効果の現れであると考えられる。この含意が慣習化されるにつれて、GO＋V構文は意味的にGO AND＋V構文と分岐を始めたのである。

しかし、GO＋V 構文ではなぜ２つの動詞を過去形にできないのだろうか。少なくとも２つの可能性が考えられる。まず、GO＋V 構文の go がすでに助動詞化の道を進み始めているという可能性である。法助動詞 must は PE では過去形を完全に失っている。英語では、不変化の助動詞のすぐ後ろに原形の動詞（不定詞）が続く線形順序はおなじみのものである。この<AUX+V_{INF}>という連続との類推（analogy）によって、GO＋V 構文の<*go* V>という連続が<AUX+V_{INF}>の構造として再分析された可能性は十分にある。(14) に示したように、GO AND＋V 構文の動詞はどちらも定形動詞（finite verb）である。しかし、GO＋V 構文の２つ目の動詞は共時的に定形動詞であることを示す手がかりがなく、すでに類推により原形不定詞と再分析されている可能性がある。また意味解釈的な理由で GO＋V 構文が過去形にできないという可能性もある。つまり、過去にできないという文法的制約があるのではなく、GO＋V 構文が過去時制と意味的に調和しないために (15) が容認されないと考えるのである。

どちらの説明がより妥当だろうか。筆者はこの疑問に答えるために約60万語の（アメリカ英語の）口語資料を用いて、GO＋V 構文の用法についての調査を行った。それによると、最も頻度の高いコンテクストは勧奨文（約25%）と未来の事象・意志の描写（約24%）である。僅差で命令文（約22%）がそれに続き、やや頻度は落ちるものの、義務の描写（約16%）と示唆（約7%）も無視できない。それぞれのコンテクストの例を (19)-(23) に示す。

(19) **勧奨文：**

a. Let's go watch the girls play.

b. Let's go hit some tennis balls.

c. Wanna go see it?

(20) **未来の事象・意志：**

a. I''ll go see if anyone is running in the hall.

b. Jug'll go listen in on 'em for us.

b. I'm just about to go lay out in my hammock.

c. I'm gonna go get some pop corn.

(21) **命令文：**

a. Go find something to weigh down the corners.

b. Go open the back door.

(22) **義務：**

a. We gotta go get some of this good stuff.

b. I have to go study for the biology test tomorrow.

c. I'd better go get the door.

(23) **示唆：**

a. Why don't you put on one and go try it out on him?

b. I'd suggest you go visit the fire department.

予想外だったのは、GO＋V 構文が使われるコンテクスがきわめて限定されていることであった。実際、以上５つのコンテクストに属する例だけで、全ての例のじつに約94%を占めている。これはあたかも GO＋V 構文がこれら5つのコンテクストに特殊化した表現であるかのようである。

しかもこの調査を通じて、使用コンテクストばかりか、GO＋V 構文が使われる文型・発話パターンもかなり限定されていることがわかった。なにしろ(19)-(23)の例は、上掲のそれぞれのコンテクストに属する例が現れる文型・発話パターンのほとんどすべてである。しかもどのコンテクストにおいても、特定の文型・発話パターンが偏って好まれる傾向にある。次の表２は、主要な文型・発話パターンごとの例数と頻度を示したものである。

Let's—	36
命令文	35
I will—	28
I'd better—	13
Why don't you—	10
I have (got) to—	10
その他	14
合計	146

表２

この表によると、(19a-b)のような let's を用いた勧奨文と(21)のような命令文だけで全体の約49%、つまり約半数となる。しかもこれらを含めて頻度の高い６つの文型・発話パターンの例だけで132例、全体の約90%を占めている。これは GO＋V 構文がほぼこの６つの文型・発話パターンに限って使用されていると言っても過言でないほどである。さらに GO+V 構文に伴なう主語の人称・数を調べてみるともっと驚くべき結果が得られる。

1人称	94
2人称	51
3人称	1

表3

この結果からすると、GO+V構文が3人称の主語とともに用いられるのはきわめて希なケースと言わざるをえない((20b)が唯一の例)。しかも1人称の主語をもつ例は全体の約64%を占めている。

さて、以上の分析結果は何を意味するのか検討してみよう。まず、表2から読みとれるのは、GO+V構文が概して未実現(unrealized)の事象との意味的親和性が強いという点である。GO+V構文は非現実領域(irrealis domain)に偏って分布するのはこのためだと考えられる。じっさい、GO+V構文は表2からもわかるように、基本的に不定詞もしくは命令形でしか使われないが、これらの語形は概して未実現の事象を述べるのに使われる。表2において「その他」としてひと括りにしてある、例数の少ないコンテクストについても同じことが言える。(24)に「その他」に属するすべてのコンテクストあげた。

(24) a. Let me go check it out.
b. Then I wanna go live with her.
c. I hate to go buy replacement plants.
d. Ready to go soak up some sun?
e. And now we get to go party with The Violent Femmes.
f. Okay, I guess I can go get aunt Hilda's jeans.
g. Well, my grandmother made me go see this guy Paolo.
h. I think it's time to go see Archie.
i. And I know just where we can go—just as soon as I go prepare something in the kitchen.

(24a-h)ではGO+V構文はすべて不定詞節に現れている。(24i)のみは例外的にGO+V構文が不定詞ではないが、このコンテクストではas soon asの意味からして未実現の事象を描写していることは明白である。

以上のように、GO+V構文が不定詞節もしくは命令文——典型的な非現実的領域——に大きく偏って分布するということは、GO+V構文が現実に起こった、もしくは起こりつつある事象の描写にはめったに使われないということを意味する。実際、注20でも指摘したように、GO+V構文がHe

goes ask(s) her または He's going ask(ing) her のような事象の単純な描写のために使われている例は見られない。この点において、GO＋V 構文は GO AND＋V 構文に較べて用法が特殊である。両者の使用範囲を較べると図1のようになる。

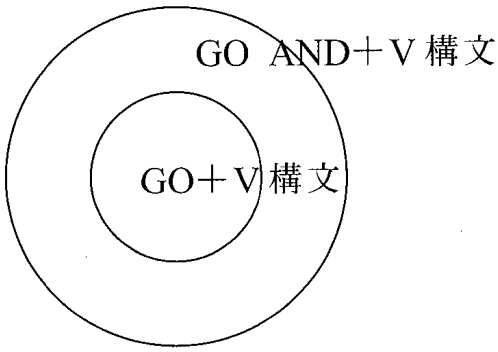

図1

図1において GO＋V 構文の使用範囲は GO AND＋V 構文の使用範囲に完全に含まれ、真部分集合となっている。上述のように、GO AND＋V 構文は過去形となり、過去の事象の描写にも使われる。かりに GO＋V 構文が GO AND＋V 構文から接続詞 and の省略によって派生される単なる短縮形であるならば、対応する(14d)が適格であるかぎり、当然(15a)も容認されねばならない。したがって、(15a)が容認不可能である理由は、GO AND＋V 構文の特性からは予測できない。これは GO＋V 構文固有の特性として説明されねばならない。つまり、過去形を許すかどうかの違いは、GO＋V 構文が GO AND＋V 構文から分岐し始めていることを示している。言い方をかえれば、この違いは GO＋V 構文がすでに構文化の軌道に乗っていることを示しているのである。

さて、この両構文の使用範囲の違いが意味の違いに起因するとするのが、筆者の考えである。では、両者の間にはどのような意味の違いがあるのだろうか。GO＋V 構文は現実的(realis)な事象と意味的に調和しないが、これはこの構文の go がすでに純粋な移動動詞ではないことを意味している。もしも GO＋V 構文の go が純粋な移動事象を表すのならば、過去の移動事象を描写したとしてもなんら不思議はないからである。なお、ここでは「純粋に」という表現に注意する必要がある。なぜなら、(19)-(23)のような典型的な GO＋V 構文では、明らかに空間的な移動が示唆されているからである。つまり、GO＋V 構文の go は現在でも空間的な移動を描写しているが、その空間的な移動をより抽象的にとらえているものと思われるのである。

ここで再び(19a)の文の解釈について考えてみよう。

(19) a. Let's go watch the girls play.

この文において、話し手は聞き手とともに女子ソフトボールの試合を観戦することを望んでいる。話し手と聞き手がグラウンドの目と鼻の先にいるならば、Let's watch the girls play で十分に事足りる。しかし、話し手と聞き手がグラウンドから十分に離れた場所にいるならば、試合の観戦には必然的に**顕著な**空間的移動が伴う。この場合、考えようによっては、グラウンドまでの空間的移動も「観戦」という行為の一部とみなしてもよい。事実、(19a)では、2つ目の動詞が単に移動の目的を表しているのではなく、むしろ主だった行為として描写の焦点となっている。この場合、解釈的に go は watch の意味に編入されるようなかたちとなる。上述のように、Biber et al.も、and を省略すると2つの動詞の関係が強くなると述べているが、これはこのような2つの動詞の意味的な融合のことを指しているとも解される。

このような go と後続する V の意味的融合が起こる理由についてさらに考察を進めよう。まずは移動という行為の社会的意味あいについて考えてみたい。いうまでもなく Where are you going?という問いかけは、聞き手が向かう目的地を訪ねるのに使われる。(25)のやりとりがそれである。

(25) A: Where are you going?
B: Over to Veronica's house.

しかし、目的地を尋ねることは、ときとして移動の目的についての問いかけと等価となる場合もある。(26)-(29)を参照。

(26) A: Where are you going?
B: Home to eat.

(27) A: Where are you going?
B: I'm into safe winter sports.

(28) A: Where are you going?
B: To play tennis with Veronica.

(29) A: Where are you going?
B: To channel my anger into something productive.

日本語でも、(30)のようなやりとりは自然である。

(30) A: どこ行くの？
B: ちょっと本を買おうかと思って。

以上の例からわかるのは、移動という行為が目的を達成する行為ととなり合わせの関係にあるということである。じっさい、日常の生活では、散歩など

歩くことが目的となる少数の場合をのぞけば、我々は何か目的があるから移動するのである。そのため我々の社会では、特定の行為が特定の場所と結び付けられることが多い。つまり、空間的移動が目的を達成することの一部をなしていることが多いのである。このような場合、移動は行為の初動段階と理解される。したがって、(19a)の発話において、go は移動を意味するのと同時に「試合の観戦」という行為に着手することを意味する。

ここで GO＋V 構文が「強意的」であるとする『ランダムハウス英語辞典(CD-ROM 版)』(以下、*SRD*)の記述に目を向けてみよう。*SRD* は GO＋V 構文に「すばやく、衝動的に、思い切って、覚悟を決めて」といったニュアンスがあるとしている。この説明はややわかりにくいが、筆者の考えでは、これは日本語の間投詞「さあ」によってパラフレーズ可能な**メタメッセージ**(metamessage)である。『大辞林』(第 3 版)の定義によると、「さあ」の関連する働きは、「人を誘ったり、催したりする」こと、および「重大なことが目前に迫って心を決めるときなどに決意を発する」ことである。人に行為を催促したり、行為を行う決意を決めるさいに発せられるという意味で、「さあ」は本質的に未来志向であり、未実現の事象と概念的親和性が高い。*SRD* の「すばやく、衝動的に」という説明は行為の開始・着手と関連があり、また「思い切って、覚悟を決めて」という部分は、「さあ」の「決意を発する」という働きと関連が深い。こうしてみると、GO＋V 構文特有の働きと「さあ」の上記の働きは奇妙なほどの一致を見せている。以上の仮定が正しければ、GO＋V 構文には行為に着手する決意(= 意志)を表明する働きがあることになる。結局、(19a)の発話には、「さあ～に着手しよう」というようなメッセージが隠れていることになる。

先ほど、GO＋V 構文の GO は純粋に移動事象を表さないと述べたが、これは GO が移動の意味に加えて「さあ」に近いメタメッセージを帯びているからである。上述のように、「さあ」は根本的に未来志向であり、未実現の事象としか解釈的に調和しない。ここで、再び表 2 に戻る。この表によると、GO＋V 構文のほとんどの例は「勧奨」「命令」「意志の表明」「義務」「示唆」といった小数のコンテクストに大きく偏って分布し、これらだけで 90%以上を占めている。上述のように、これらのコンテクストはいずれも未実現の事象と密接に関わるという意味で、未来志向である。GO＋V 構文の go に「さあ～に着手しよう」というメタメッセージがあると考えれば GO＋V 構文の大きく偏った分布が容易に説明できる。GO＋V 構文が GO AND＋V 構文から分岐し、独自の構文としての歩みを始めたのは、前者に

このメタメッセージが生まれたからだと考えられる。

4．GO＋V 構文と uton

前節で行った GO＋V 構文の分析により、OE 期に起った文法化のプロセスを現代に再現するお膳立てがすべて揃った。そこでこの節では uton が勧奨文の V-IFI へと文法化されていくプロセスを GO＋V 構文との比較をもとに再現してみたい。

4.1 U-SMC 構文の起源

手始めに、uton が V-IFI への変化の軌道に乗ったきっかけについて考えてみたい。まず、上掲(6)のような U-SMC 構文の統語構造に注目する。

(6) wutum gongan to helpan hild-fruman
let's go:Inf to help:Inf battle-chief:D
'Let us go (to him) to help our war-leader.'

この文の構文パターンを模式的に表すと(31)のようになる。

(31) <*uton*+Inf (*to*-Inf)>

(31)の文末の to 付不定詞は、目的を表す副詞節なので、当面は無視する。ここでは<*uton* Inf>という連続をどのような構造として分析するかが問題である。これにはいちおう 2 つの可能性がある。すなわち、Inf を uton の補部(complement)とみなす分析と、副詞節とみなす分析である。少なくとも、U-SMC 構文発達の初期の段階では、後者の可能性を選択する他はない。なぜなら、uton は GO を意味する自動詞 witan の 1 人称複数・仮定法・現在形であり、もともと不定詞補文は選択しないからである。じっさい移動動詞としての witan には他動詞としての用法は知られていない。表層構造は同じであっても、(6)の文は(32)のような不定詞節が補部(目的語)となっている文とは異なった構造を持っていたと考えられるのである。

(32) Romane blunnen *ricsian* *on Breotene*
Romans cease:Pst:3pl govern:Inf in Britain
'The Romans ceased to have dominion in Britain.' [*Bede*, 44. 2]

(32)の強調を施した不定詞節は blinnan 'cease' の補部である(cf. 小野・中尾 (1980: 426))。これは PE cease のとる不定詞節を補部と分析するのと同じである。自動詞である witan は補部を選択しないので、<*uton*+Inf>に対して(32)と同様の構造を想定することはできない。

では、U-SMC 構文の不定詞節が補部でないとすると、それは副詞節とい

うことになる。するとさらに2つの可能性が生ずる。まず、不定詞節を補語節と分析する可能性がある。例えば、(33)の不定詞節がそれである。

(33) ac　læt　hi　*beon*　*her*　*atgædere*　*gelede*
Conj let:Imp:2sg them:A be:Inf here together lay:PP
'But let them be here laid together.'　[*Lives of Saints* 30. 443]

OE の lætan 'let' は現代英語の let と同様、2項動詞とみなされ、強調を施した不定詞節は目的語 hi と叙述関係にある補語と分析される。しかし、(33)に見られるような補語節は他動詞構文に現れるので、この分析も妥当とは思えない。さて、もう1つの可能性は、U-SMC 構文の不定詞節を副詞節(adverbial clause)と分析する方針である。OE において、副詞節としての不定詞節には、おもに目的節・原因節・結果節があるが、これらのうち GO を表す witan と意味的に調和しそうなのは目的節だけである。次の(34)がその例である。

(34) Ic　ðar　furðum　cwom　to　ðam　hring-sele
I　there　first　come:Pst:3sg　to　Det:D　ring-hall
Hroðgar　*gretan*
Hrothgar　greet:Inf　[*Beowulf* 2009]
'There I first came to the ring-hall to greet Hrothgar.'

uton に後続する不定詞が(34)と同様の目的節に由来するとすれば、U-SMC 構文の解釈は基本的に GO と目的節の意味の組み合わせに仮定法による勧奨的な意味が重畳したものとみることができる。つまり、U-SMC 構文はちょうど(19)のタイプの文と同じ<V + 副詞節>という構造を持っていたと考えられる。そうならば、U-SMC 構文も GO+V 構文も同じ意味環境から生じてきたことになるので、後者に現在生じつつある意味変化が前者にも起ったと仮定することの妥当性が高まる。

4.2 構文化

次に、U-SMC 構文成立のきっかけとなった<*uton* + 副詞節>というコロケーションがいかにして構文化していったかを考えてみよう。

まず、この発達の初期段階では、uton は GO を表す純然たる動詞であった。したがって、U-SMC 構文が成立する以前は、かりに SMC 構文で uton が使われていても、それは何の変哲もないただの SMC 構文にすぎなかった。したがって、かりに(3)の fare (< faran 'go')のかわりに類義語の uton を用いても、さほど大きな解釈の変化はみられなかったに違いない。[23]

(3)' *#uton* we on ge-hende tunas
go:Subj:1pl we in next:A towns:A
'Let's go into the next towns.'

(3)'のような文がもし実在したとすれば、通常の勧奨文として解釈されただろう ('Let's go into the next towns')。このような一般的な用法を眺めていても、いっこうに uton の間投詞化が始まった理由は見えてこない。

Traugott and Dasher (2002) も強調するように、意味変化は概してコンテクスト横断的に——様々なコンテクストにおいて一斉に——起るものではない。むしろ意味変化はローカルなコンテクストにおいて特定の使われ方をすることから生ずる。コンテクストや使用法が特殊であればそれだけ変化が生じやすい。つまり、言語表現を1つのコンテクストにおいて特定の談話上の目的のために使用することが引き金となって意味変化が起こり、それが時とともに他のコンテクストへと拡散していくのである。変化の誘因となった当のコンテクストでは、変化には機能的な動機があり、そのため変化は比較的速く進む。しかし、変化が他の環境に拡散していくためには、まず変化が生じたコンテクストにおいて、コロケーションが固定化し、Morgan (1978) のいう**使用の規約** (convention of usage) が生じなくてはならない。使用の規約とは、ある特定のコロケーション[24]がきわめて頻繁に特定の目的のために使用されることにより、半ばイディオム的[25]な性質を帯びることをいう。かくして1つのコンテクストにおいて規約化した用法が、次第に他のコンテクストに拡散していくのである。この「ローカルなコンテクスト→拡大」という変化の拡散の図式は、意味変化だけでなく、言語変化一般の特徴である。例えば、Hock and Joseph (1996) も統語変化に関して同様のコメントをしている。

上述のように、U-SMC 構文の誕生の契機となったコンテクストは、uton が目的を表す不定詞節とともに使われ、しかも移動の着点 (goal) が背景化された (3)"のような文だっただろう。

(3)" #uton we *Hroðgar gretan*
go:Subj:1pl we Hrothgar greet:Inf
'Let's go to greet Hrothgar.'

OE では目的節の不定詞に to が付加される場合と付加されない場合があり、散文では to 付の不定詞が用いられやすい (cf. 小野・中尾 (1980: 431))。OE 当時の to は前置詞で、方向性の意味を残していた。目的節で to 付不定詞が使われやすいのは目的が比喩的に方向と結び付けられるからだろう。後代の

U-SMC 構文の不定詞には例外なく to はないが、散文での使用を考えると、uton と共起した不定詞はもともと to 付であった可能性も否定できない。かりにそうだとすると、発達の過程で to 付不定詞は to なし不定詞に置き換えられたことになる。この to の脱落には先にふれた類像性が関与したことも考えられる。GO AND＋V 構文の and がそうであったように、2 つの動詞の間に介在する要素は、両者を形式的に分離するばかりでなく、認識的にも分離しているものと理解される。したがって、当時の話者が他の<V + Inf>構造との類推から to を省略して 2 つの動詞の間の意味的親密さを強調したという可能性がある。

ともあれ、顕著な空間的移動を必要とする行為に聞き手を誘うというコンテクストにおいて(3)”のような文が発話されたことが、U-SMC 構文誕生のきっかけであったと仮定してみよう。次に問題となるのは、<*uton*+目的節>という何の変哲もないコロケーションが使用の規約として固定された経緯である。この点について OE テクストを調べてみても、やはりわかることは何もない。したがって、ここからは GO＋V 構文との比較に基づいて考察を進めよう。3.2節で指摘したように、社会生活において空間的移動は行為と切っても切れない関係にある。古代以降の社会では、社会分業のため特定の行為が特別の場所においてのみなされるという傾向が強いからである。例えば、OE 期の社会では、「刀剣を買う」は「集落の鍛冶屋の家に行く」と言うのと同義であったかもしれない。上掲(28)のようなやりとりが自然に感じられるのはこのためである。

(28) A: Where are you going?
　　B: To play tennis with Veronica.

(28B)が(28A)の自然な返答となりうるのは、まさに「～に行く」が「～をする」を強く含意するからである。したがって、(3)”のような<*uton*+目的節>というコロケーションが高頻度に用いられたことは想像に難くない。

さて、U-SMC 構文成立以前の<*uton*+目的節>では、uton の方が主節の動詞となるので、本来はこちらに意味の焦点が置かれていた。つまり、(3)”の段階では、空間的移動の方が主たる行為であって、不定詞は補足的な役割を担っていたにすぎない。これは GO＋V 構文でも同じであった。そして GO＋V 構文の場合と同様に、次第に文の意味的焦点が uton から不定詞へと移っていったものと思われる。3.2節で論じたように、これはもともと移動が他の行為の部分をなす――つまり、移動は目的を達成するのに必要ではあるが、それ自体が主たる目的ではないことが多い――ので、伝達される情報の焦点

にはなりにくいからである。こうして uton の意味は顕著さを失い、次第に後続する V の意味に編入されていく。最終的には、uton の移動の意味はすっかり背景化されてしまい、目的であった行為が前面に出された。そうなると、ますます uton の概念的独立性が蝕まれ、ついには後続する動詞に従属する補助動詞のようになった。

重要な点は、この変化が移動を要する行為に聞き手を誘うというローカルなコンテクストで起こったということである。GO＋V 構文はいまだ go の移動の意味が失われていないという点で U-SMC 構文と異なる。このため、GO＋V 構文は移動を含まない行為の勧誘には使えない(したがって、Let's go know each other というのはおかしいだろう)。これに対して、U-SMC 構文の uton は完全に移動の意味を失ってしまっていた。このため、uton はどんな種類の動詞とも使われた。極端な場合、(6)のように、uton の後ろに GO を意味するもう 1 つの動詞を配置しても解釈的に齟齬をきたさなくなった。他方、GO＋V 構文ではそのような発話は不可能である。

(35) *Let's go go to the mall.

つまり、U-SMC 構文の uton は移動の意味を失ったがゆえにローカルなコンテクストをこえてあらゆる勧奨文へと拡大したのである。この使用域の拡大は uton の脱動詞化に拍車をかけただろう。

4.3 間投詞化

ところで、文法化の初期段階に特徴的な意味変化に、**漂白化**(bleaching)がある。漂白化とは、文法化の素材となる語彙項目(起源要素)の意味が次第に**特定性**(specificity)を喪失するプロセスである(cf. Heine and Reh (1984), Heine at al. (1991: 41-42), etc.)。漂白化が進行すると、起源要素の意味は意味構造の骨組みをのぞいて次第に消滅していく。GO＋V 構文の go では、漂白化はまだ初期段階にあり、移動の意味はまだ健在である。しかし、すでに過去の事象の描写ができないという点からすると、go の意味構造にも変化が生じていることはまちがいない。じっさい、上述のように、GO＋V 構文の go は意味的に顕著さを失っている。これに対して、移動の意味の漂白化が究極まで進んだのが U-SMC 構文の uton である。GO＋V 構文の go の行く末は、このようなものかも知れない。

さて、3.2節で論じたように、偏った分布や過去形にならないという文法的特性から、GO＋V 構文の go には日本語の「さあ」に近いニュアンスがあると考えられる。GO＋V 構文の go に「さあ」のニュアンスが生じたも

ともとの契機は、go と目的節が共起したことであった。U-SMC 構文の不定詞が目的節だったとすれば、let's を伴う GO＋V 構文と U-SMC 構文発達の発端となった推定上の(3)"はほぼ同じ意味環境を出発点にしていたことになる。したがって、類似したニュアンスが U-SMC 構文の uton にも生じたとしても不思議はない。

さて、GO＋V 構文の go の「さあ」に近いメタメッセージはもともと**会話の含意**(conversational implicature)であったものが、慣習化により定着したものである。Levinson (1983)によると、会話の含意は普遍的な行動原理に基づく談話方策(discourse strategy)から生ずるので、その生成パターンはきわめて普遍性が高い。したがって、類似した意味を持つ発話が類似したコンテクストにおかれると、どの言語でも類似した含意が生じやすい。OE と PE は同じ英語でありながら、いくつかの点で別の言語のように異なっている。しかし、文法や語彙の違いは含意生成のプロセスとは基本的に無関係である。むしろここでは発話のメッセージ内容とコンテクストの組み合わせが重要となる。U-SMC 構文と let's を伴う GO＋V 構文はどちらも勧奨文で用いられ、またどちらも<*let's go* +目的節>という意味パターンを持っている。したがって、2つの構文に時代を越えて類似した会話の含意が生まれた可能性は高い。

以上のように、目的節との頻繁な共起が引き金となって、U-SMC 構文の uton にも GO＋V 構文に見られるような「さあ」に近いメタメッセージが生じたとすれば、これが間投詞化の軌道に乗る直接の衝力だったと想像される。この想定のもとで uton の発達をさらに追ってみよう。その後、このメタメッセージが慣習化により uton と強固に結びつけられると、もともとあった移動の意味よりも解釈の前面に出されるようになった。これと同時に、漂白化により uton から GO の意味が次第に失われていったはずだ。これらのプロセスが完了すると、最終的に<*uton*+目的節>には「さあ～しよう」の意味だけが残る。uton に間投詞としての性質がそろったのはこの段階である。一般に間投詞は語彙的意味を持たず、特定の行為に特化することが多いが、これはまさにこの発達段階の uton にも当てはまる。さらにこの uton の意味変化に伴って、<*uton*+目的節>は「勧誘」という発語内行為に特化した1つの機能的単位(functional unit)と再分析されただろう。するともともと目的を表していた不定詞は節の本動詞と再解釈される。そうなると、ますます uton は節の補助的要素としての性格を強めていく。そしてこれが OE 期における U-SMC 構文の段階である。

最後に、U-SMC 構文のその後について少々論じておこう。uton の間投詞化がこのまま続けば、ある段階で uton は動詞性を完全に失ってしまったかもしれない。しかし、そうならなかった。ME 期に U-SMC 構文や SMC 構文は“let us …”にとって代わられたのである(cf. Traugott (1995: 36))。2.1節の(2)に例をあげたが、“let us …”を用いた勧奨文は OE の頃から存在したが、Traugott (1995)によると、この発話パターンは ME 期を境に急速に一般化し、最終的には PE の導入小辞 let's を生みだす。ME 期に U-SMC 構文や SMC 構文が消えていった背景には、おそらく仮定法の衰退があると思われる。中尾 (1972: 274-275)によると、仮定法は15世紀を境に法助動詞の発達の陰で次第に衰退していく。以前仮定法が使われた環境で擬似仮定法の should が使われだすと、その衰退には拍車がかかった。結局、U-SMC 構文や SMC 構文が“let us …”に敗れたのは前者が仮定法に依存した構文だったからではないかと思われる。

4.4 まとめ

以上、主に GO+V 構文の発達との比較により、uton と U-SMC 構文の発達の再現を行ってきた。それをまとめたのが次の表 4 である。

第 1 段階	witan 'go'の**仮定法語形** uton が SMC 構文で使われると、概略 Let's go の意味の勧奨文(hortative)として解釈された。特定の場所に移動するという行為には、具体的な目的があることが多いので、しばしば uton には目的を表す不定詞節が付加された。しかし、まだこの段階では、<*uton*+目的節>は単なる組み合わせでしかなかった。
第 2 段階	<*uton*+目的節>というコロケーションが頻繁に使われるうちに、uton と後続する不定詞の間の意味関係が次第に強化され、両者の間に使用の規約(convention of usage)が生じた。<*uton*+目的節>が頻繁に使われたのは、OE 期の社会生活においても移動と行為が切っても切れない関係にあったからだと考えられる。
第 3 段階	uton と後続する不定詞の意味的関係が強化されるにつれて、uton の表す移動の意味と不定詞の表す行為が融合されて、移動+行為で全体がひと続きの行為のように解釈されるようになった。これにより、uton の移動の意味が背景化されていくが、それと同時に動詞に日本語の「さあ」に相当するメタメッセージが生じてきた。このあたりから uton の移動の意味が漂白化され始める。

第4段階	utonの移動の意味が漂白化により完全に失われ、「さあ」に相当するメタメッセージのみが残された。これにより、<*uton*+Inf>は「さあ～しよう」だけを意味するようになった。この段階ではutonに後続する不定詞はもはや目的節と解釈されなくなり、それに伴い<*uton*+Inf>はひとつの機能的単位として再分析された。utonの移動の意味が失われた結果、移動を伴う行為の「勧誘」というコンテクストの制約がなくなり、ついにはどの類の動詞とも意味的に調和するにいたった。これをもって、utonの間投詞化が完了した。

表4

5．結論

本論では、U-SMC構文の発達について考察し、utonがV-IFIへと文法化されていくプロセスの再現を試みた。3.1節で論じたように、断片的にしか資料が残されていない遠い過去の言語変化について、ただ文献資料から変化の原因やプロセスを知ることはとても困難である。OEのテクストを調査しても、utonがOEの段階で実際に間投詞として分析できるかどうか、またこの変化が起こったのはなぜかといった問題に答える手がかりはない。そこで本稿では、現代語の類似構文との比較に基づく言語変化の再現手法を用いてutonの発達プロセスを推測し、表4としてまとめた。その際に比較対象として用いたのは、PEのGO＋V構文であった。

注

1．ちなみにQuirk et al.(1972: 404)は、"Let's ..."のletを**導入小辞**(introductory particle)と分析し、他動詞のletとは区別すべきであるとしている。本稿の用語でいうと、let'sもV-IFIの1例である。

2．上述のlet'sがV-IFIへと変化したのは後代の発達であり、OEのlætanは純然たる動詞である。Traugott (1995: 36-37)によると、let usが勧奨文で頻繁に使われるようになったのは中英語期(ME)からであるという。

3．subjunctiveはラテン語のsubjunctivusに由来し、それはさらに動詞subjungere「付加する」「接合する」の派生形なので、筆者は常々「仮定法」よりも「接続法」という訳語の方が適切だと感じている。しかし、本論では、混乱を避けるために、日本の英語学の伝統にしたがい、「仮定法」

という用語を用いる。

4．utonには、wutonなどいくつかの異形(variant)があるが、本論では筆者が用いたOEテクストにおいて最も頻度が高いutonをその代表形として用いる。

5．言語の経済性については、Haiman (1985a)を参照。

6．筆者が知るかぎり、SMCにおいてutonが不定詞なしで単独で用いられている例は存在しない。Mitchell (1985)やVisser (1966)などもそのような例の存在にまったく言及していない。

7．ひょっとするとMitchellの考えの背景には、OEにはPEのような<助動詞 + Inf>という構造は存在しなかったという暗黙の想定があるのかもしれない。

8．とは言っても、もちろん不定詞が主節で自由に使えるわけではない。(7)の構文は「命令」「指示」「要求」といったいくつかの発語内行為の遂行のためだけに使われる。筆者の見解では、(7)の構文はもともと遂行動詞の不定詞補文(infinitive complement)であったものが、脱従属化(insubordination)と呼ばれる統語変化(syntactic change)により主節化したものと考えられる。Maeda (2007)では、OEのSMCも同様に、遂行動詞の選択する名詞節(noun clause)が脱従属化により主節化したものと主張した。

9．このcome onは、聞き手の言動に対する苛立ちの感情を表明するという働きを持つ。

10. 脱範疇化とは、文法化のプロセスにおいて起源要素(source element)が次第に語彙範疇(lexical category)としての統語的特性を失っていくことをいう。詳しくは、3節を参照。また、Bybee at al. (1994)、Heine and Reh (1984)、Heine et al. (1991)、Hopper and Traugott (2003)などを参照。

11. 汎時性(panchrony)とは、Saussure (1916: 134-135)が共時性・通時制とならんで示した文法研究の第3の視点である。

12. 脱範疇化は緩慢なあまり、母語話者によって意識されることはほとんどないが、常に言語のあちこちで進行しているありふれた現象である。

13. Hock and Joseph (1996)などを参照。

14. 再分析のメカニズムについては、Harris and Campbell (1995)に詳しい。ただし、彼らはもっぱら言語獲得時になされる再分析に注目するLightfootの立場には批判的である。

15. ここで現実を括弧に入れたのは、言語の研究者がしばしば忘れがちな1

つの重要な事実を想起していただきたいからである。それは、書かれた文書は言語そのものではないという単純な事実である。Hall (1976: 86) からの次の引用を参照。

… the writing system is an abstraction of the spoken system and is in effect a reminder system of what somebody said or could have said.

したがって、Milroy (1992) も指摘するように、言語変化は書かれた文書の中では起らない。言語変化は常にコミュニケーション行為の中で生ずるのである。

16. Lightfoot (1979) では、ここで論じているような史的研究の社会言語学的な問題をほとんど考慮していない。Lightfoot (1991) では、この点についてやや改善が見られるが、根本的な解決とはなっていない。Lightfoot のアプローチの問題点については、Harris and Campbell (1995) を参照。ちなみに史的研究の資料の信頼性の乏しさについては、Milroy (1992) や Traugott and Dasher (2002) もとり上げている。

17. 筆者のここでの考えは、Milroy (1992) が音韻変化の説明のために用いる手法に強い影響を受けている。Milroy (1992) が指摘するように、現代語の変化パターンとの比較により過去の変化を説明するという手法が成り立つためには、地質学の説明に用いられる「斉一説」(uniformitarianism) の言語版を採用する必要がある。斉一説とは、過去に起こった地質現象はすべて現在にも起こりうるという仮説である。その言語版は、「過去に起こった言語変化はすべて現在にも起こりうる」となり、これを筆者は「言語斉一説」(linguistic uniformitarianism) と呼ぶ。つまり、言語変化の説明は現代語に見られる変化の範囲内でなされねばならない。これには、批判もあるが、このような基準がなければ、どんなグロテスクな説明であっても、言語資料や理論と調和するかぎりにおいて、妥当とされてしまう可能性が生じる。このような事態を阻止するため、言語斉一説が必要となるのである。

18. Lightfoot (1979) は、英語法助動詞の助動詞化 (auxiliation) が意味の変化とは独立して起こったと主張している。しかし、現代語に見られる助動詞化にはたいてい意味の変化が伴うので、言語斉一説からすると、この主張は疑わしい。

19. しかし、GO+V 構文の V は and がないうえ、過去形や 3 人称単数の形では使われないので、形のうえでは原形不定詞との違いがない。このため、すでに現在、類推 (analogy) により原形不定詞として再分析されつつある

のかもしれない。

20. また、筆者の調査では、ついに He goes ask(s) her のように、go(および後続する V)が3人称・単数・現在となっている例は見られなかった。あるいはこれも GO＋V 構文に課される文法的制約なのかもしれない。ただしこれは後で論ずる GO＋V 構文の意味・機能的特性の結果であるとも考えられる。

21. 理由はどうあれ、これらの GC は実際に母語話者によって容認されているので、もちろん真の意味で非文法的とはいえない。

22. しかしこの省略は and の省略のように単純なものではない。本論ではこのタイプの省略がどのようになされるかという問題について紙幅の関係上掘り下げない。

23. ただし、筆者の調査では、(3)'のように uton を移動の動詞として用いる SMC 構文は見つからなかった。(3)'の#は筆者が作った推定上の例であることを示す。

24. 本論では「コロケーション」という用語は「頻繁に使われる語列」といったきわめて一般的な意味で用いられている。したがって、コロケーションを形成する語列は、構成素(constituent)をなす場合とそうでない場合がある。また不連続の要素間でコロケーションが形成されることもある。

25. 「半ばイディオム的」という用語は他にもっとふさわしい呼称がないので、やむをえず用いるが、いくつかの点で適切ではなく、誤解を生む元になる。じっさい、使用の規約による固定化された表現法はまったくイディオム的でないものも含まれている。例えば、Morgan (1978)によれば、電話口で This is X speaking 「X です」とか May I speak to X?「～さんいらっしゃいますか」などという言い回しがそれである。より厳密に表現すると、「陳腐な常套句で、(程度は様々だが) 部分的に合成性(compositionality)失った」ほどになり、本稿が用いる「半ばイディオム的」はこのやや冗長な表現の略語と理解していただきたい。

References

Austin, John L. (1975) *How to Do Things with Words* (2nd ed.). Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English.*

London: Longman.

Bybee, Joan, Revere Perkins and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Language of the World.* Chicago: The University of Chicago Press.

Fillmore, Charles J., Paul Key and Catherine O' Conner (1988) "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*," *Language* 64: 501-538.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Chicago: The University of Chicago Press.

Haiman, John (1985a) *Natural Syntax: Iconicity and Erosion.* Cambridge: Cambridge University Press.

Haiman, John (ed.) (1985b) *Iconicity in Syntax.* Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Hall, Edward T. (1976) *Beyond Culture.* New York: Anchor Books/ Doubleday.

Harris, Alice C. and Lyle Campbell (1995) *Historical Syntax in Cross-linguistic Perspective.* Cambridge: Cambridge University Press.

Heine, Bernd and Mechthild Reh (1984) *Patterns of Grammaticalization in African Languages.* Cologne: Universitat zu Koln.

Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Friederike Hünnemeyer (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework.* Chicago: The University of Chicago Press.

Hock Hans H. and Brian D. Joseph (1996) *Language History, Language Change, and Language Relationship: An Introduction to Historical And Comparative Linguistics.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (2003) *Grammaticalization* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.

Jones, Michael A. (1996) *Foundations of French Syntax.* Cambridge: Cambridge University Press.

Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press.

Lightfoot, David (1979) *Principles of Diachronic Syntax.* Cambridge: Cambridge University Press.

Lightfoot, David (1991) *How to Set Parameters: Arguments from Language Change.* Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Lord, Carol D. (1993) *Historical Change in Serial Verb Constructions.* Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Lyons, John (1977) *Semantics* (2 vols). Cambridge: Cambridge University Press.

Maeda, Mitsuru (2007) "Insubordination in Old English," ms., Yamaguchi University.

Milroy, James (1992) *Linguistic Variation and Change.* Oxford: Blackwell.

Mitchell, Bruce (1985) *Old English Syntax* (2 vols). Oxford: Clarendon Press.

Morgan, John L. (1978) "Two Types of Convention in Indirect Speech Acts," in Cole, Peter (ed.), *Syntax and Semantics* 9: *Pragmatics.* New York: Academic Press. 261-280

中尾俊夫 (1972) 『英語史Ⅱ』東京：大修館.

小野　茂・中尾俊夫 (1980)『英語史Ⅰ』東京：大修館.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English.* London: Longman.

Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de Linguistique Géneralé.* Paris: Payot.

Searle, John R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Traugott, Elizabeth C. (1995) "Subjectification in Grammaticalization," in Stein, Dieter and Susan Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectivization: Linguistic Perspectives.* Cambridge: Cambridge University Press. 31-54.

Traugott, Elizabeth C. and Richard Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change.* Cambridge: Cambridge University Press.